

# Ocean Breeze

Newsletter of the Atmosphere and Ocean Research Institute  
The University of Tokyo

2013

冬

第11号

## CONTENTS

- 02 **特集**  
**ありがとう! おつかれさま! 淡青丸**
- 05 大槌レポート⑥ シンポジウム  
「大槌の復興から世界にひろがる海洋研究」報告
- 06 研究人生よもやま話⑥ 旅行、英語と研究
- 08 **報告**  
**柏キャンパス一般公開 2012**
- 10 イベントレポート  
AORI スタッフ日誌⑩ 事務部 総務チーム
- 12 書き手自身による新刊紹介



「2012年8月8日、大槌湾に入る淡青丸」川辺幸一 提供



# ありがとう! おつかれさま! 淡青丸

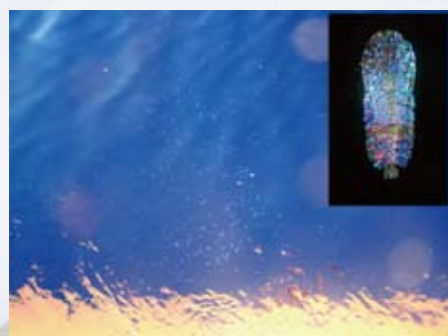
全国共同利用施設として日本近海における海洋調査研究に活躍した  
学術研究船淡青丸(第2代)が2013年1月25日に最終航海を終えました。  
淡青丸を利用した所内外の研究者たちから、  
淡青丸にまつわるエピソードや思い出の写真を寄せていただきました。

## 地震に遭遇

ワッチ明けでベッドに横になった途端下から突き上げるドドっという振動を感じ、エンジントラブルかと船員に聞くが相手にされない。もしかとラジオをON。「ただ今十勝沖でM7.9の大地震が……」。その時偶然震源近傍へ設置の地震計を回収に向かっていた。早速ブリッジで双眼鏡の某先生(地震研)へ。小生をみてニヤリ。KT-68-8にて。(乙部 弘隆・元海洋研究所)

## 宮城県沖の海底地殻変動観測

切迫している宮城県沖地震に備えて想定震源域近くの2点に海底局を設置し、淡青丸から観測パイを曳航して繰り返し観測を継続した。それが功を奏して、2011年3月の超巨大地震に伴う31mにもおよぶ海底変位を観測できた。2桁の精度をもつこの観測は、海溝軸付近で数10mの巨大なすべりがあったことを決定づけた。(藤本 博己・東北大学災害科学国際研究所)



舷側から見たサフィリナの群れ  
(西田周平提供、インセットは西川淳)



べた風の東シナ海 (西田周平提供)

## 淡青丸の風景

初めて乗船したのはKT-90-10次航海。以来20数年、どの研究船よりもお世話になった。きびきびと作業する乗組員。出航前から入港後まで休むことなく働き続ける研究者。観測中に見た信じられないほど美しい夕陽。強烈な風と波。船酔いの苦しみ。「海水ポンプお願いします」「ウインチ・スロー」。入港時のカレー。クリーム色の船体に淡い青の煙突。黄色い銀杏の葉に白いT字のファンネルマーク。僕の中でずっとずっと生き続ける。淡青丸、ありがとう!(西川 淳)

## 種子島の鍋料理

淡青丸の艦装からかわりはじめ、もう30年たつのかと感慨無量です。1992年12月、シラスウナギ調査の航海で、種子島に入港し、夜の海岸を一晚中綱でシラスウナギを採っていたときのことで。地元漁師の人が、寒いだろうと番小屋で鍋料理を作ってくれましたが、我々には甘すぎて(種子島風の味付け)作り直したという思い出があります。(蓮本 浩志・元海洋研究所)



清水港での海の日一般公開 (永江英雄・元大気海洋研究所 提供)

## 地獄一転至福の航海

2009年8月のKT-09-15次航海では、鹿児島を出港していきなり2つの台風に見舞われ大荒れのなかを名瀬に寄港したが、石垣までの後半は連日、油を流したような風が続き、めったに見られない「海の宝石」サフィリナの群れを毎朝観察することが出来た。船に弱い私にとって至福の1週間だった。(西田 周平)

## アネロンが必需品

大学院に入学して以来、淡青丸には20回乗船させて頂きましたが、淡青丸で船酔いをしなかったことはほとんどなく、最近乗船中は毎日酔い止め薬(アネロン)にお世話になっていました。淡青丸乗船が決まると少し憂鬱になったのも今となってはいい思い出です。(李 雅利)

## デッキにて

昼夜を通した観測作業に疲れてヘルメット、カッパ、ライフジャケットを着けたまま艦のデッキでごろんと寝そべってうたた寝をした。チークのデッキは気持ちいい。そんな艦のデッキにヘリコプターからレスキュー隊員が降りてきて救助者を搬送するシーンに感動したこともある。(今井 圭理・北海道大学)

## 船が新しくなる喜び

今でも鮮やかに思い出されるのは竣工後に初めて乗った航海である。初代に比べて広い実験室、機能的なガントリー、快適な居住性に目を奪われた。そして何よりも揺れ方が大きく違った。初代は荒天でなくても大きく揺れたが、2世はエレガントに滑るように航走した。船が新しくなることの喜びを体感した。(古谷 研・農学生命科学研究科)



淡青丸メスルームにおける、ウナギの回遊経路を追跡するためのポップアップ実験航海の初日打ち合わせ風景 (塚本勝巳提供)

## 百歩弱の淡青丸

20年前、お台場の荒れ野を抜けて乗船した最初の航海は三陸沖の大時化でした。ひとり研究室で何時間も待つ以来、淡青丸と素敵な船員の皆様とが私の海です。100歩弱で生活と研究のすべてが完結し、不眠不休で仕事をし、乗合の異分野研究者と出会い、美味しい食事に舌鼓を打ちました。ありがとう、淡青丸。これからは淡青丸の海を子どもたちに伝えていきます。(窪川 かおる・理学系研究科)

## かんちゃん、淡青丸に救助される!

KT-02-7次航海で、八丈島から大槌まで大気と海洋の観測を、淡青丸と海洋大気無人観測艇「かんちゃん」との2隻で行おうとしました。荒天下で流れ網がスクリューに絡んで漂流してしまつた「かんちゃん」へ藤田一等航海士(当時)が牛若丸のように飛び移り(ビデオあり)、大槌港まで淡青丸が曳航しました。この時の観測から三宅島の火山噴火が植物プランクトンを増やすということを見つけたのです。(植松 光夫)

## 釜山への外航

私にとって初めての淡青丸乗船は、忘れもしないKT-88-18長崎～釜山～下関航海でした。私にとっても淡青丸にとっても初めての外航であり、なんといってもソウルオリンピック開催中での釜山寄港というおまけつきでした。それ以来、計10航海に乗船しました。部員食堂で乗組員や研究者と大騒ぎしたことを昨日のこのように覚えています。今までありがとうございました。(山本 富士夫・海洋研究開発機構)



船内風景 (永江英雄・元大気海洋研究所 提供)

## 淡青丸ミレニアム・クルーズ

イルカやウミガメの研究航海で初代淡青丸を知っている私には、2代目淡青丸のお披露目の勇姿と感嘆をいまだ忘れることができない。こんな最新鋭の研究船さえあれば何でもできると、胸がときめいた。揺れに揺れた2000年12月の東シナ海ミレニアム・クルーズ、真夜中にパジャマ姿の並波船長が後部甲板に仁王立ち。真っ暗な海をいらんで、調査続行を決断してくれた。淡青丸乗組員各位に心から感謝する。その思い出の淡青丸も長い務めを終えて今退役、お疲れ様でした。(塚本 勝巳)



2006年、窪川教授が錦江湾で鯨骨を回収した航海の打ち上げ (笹井雄二・海洋研究開発機構提供)

## 初代淡青丸の思い出

私の思い出は初代の淡青丸です。昭和40年の夏だったかに、修士課程1年でしたが、多賀先生の微生物の航海にお手伝いとして乗船させて頂きました。多分、江ノ島から出港して、すぐに外洋に出たので、航海計画の打ち合わせの最中に気分が悪くなって、ベッドに連れて行かれ、3日間は吐き続けました。寝返りを打つたびに吐いて、3日間は食べ物喉を通りませんでした。3日目に少し風いできたときに、賄いの野沢さんがおにぎりを持参してくれたので、やっと元気が出ました。この船は居室に行くときに、エンジンルームの油の臭いを嗅ぐので、すぐ船酔いがひどくなってしまいました。この航海では全く役に立たない状態でした。それにしても懐かしい思い出です。(大和田 統一・東京大学名誉教授)





KT95-9, 10クアム外航時のアブラ港岸壁で。背後はコンテナ岸壁(原口悟・工学系研究科 提供)

## ありがとう!おつかれさま!淡青丸

### 最初の航海は微生物部門

2代目淡青丸の最初の研究航海は微生物部門によるものだったが、私はアメリカにいたので乗れずに悔しい思いをした。帰国してから乗った最初の航海のことは、どういわけかほとんど覚えていないが、船員の統制の取れた動きと観測技術の高さが妙に印象に残っている。新しい船はどんな人々とどんな歴史を刻んでいくのだろうか。(木暮 一啓)

### 様々な研究に貢献

淡青丸には1974年から1991年の間に21回延べ120日ほど乗船した。東京湾から出て房総半島をかすむ時に40°以上も傾いて電源が落ち、補助電源だけで20分ほどの間位置がわからなかった。オケアンやピストンコアで海底の泥を取り、ドレッジで岩石を採集した。小回りが利いて大変有用な船であった。様々な研究に大きく貢献したと思う。(藤岡 換太郎・元海洋研究開発機構)



2008年、淡青丸にストリーマケーブルを搭載したため白丸(右)と同時に出港(笹井雄二・海洋研究開発機構 提供)

### 石廊崎沖の三角波

KT-92-3航海では、寒気の吹き出しのため、清水港へ避難した。東京港入港日が迫り、やむなく駿河湾を出て東に針角すると、ドーンという音とともに淡青丸は40度近く傾き、研究室ではラッシングしていないあらゆるものが床に散乱しました。これが江戸時代からの海路の難所、石廊崎沖の三角波なのでした。後にも先にも、研究船でこれ以上船が傾いた経験はありません。(小松 輝久)

### さらば愛しの淡青丸

1990年5月18日のこと、室戸岬のはるか沖合に、南海トラフ付加体の謎に挑む深海掘削船Joides Resolution号(18,600トン)の不動の姿がありました。黒潮とがっぷり四つに組んで46日目、船内の生鮮食料品はすでに底をつき、観測機材は消耗がひどく、作業は日に日に困難さを増すばかり。台湾近海での台風発生のお知らせは、乗船研究者29名の表情を一層暗くしました。まさにそのとき、代替の機材を携えた淡青丸が、荒波を蹴立ててやってきたのです。機材だけではありません、新鮮なレタス・トマトに苺とバナナ、とろけるようなマグロの刺身……。皆とびあがって喜び、JR号の食堂は一転、お祭り騒ぎとなりました。つかの間が過ぎ、小さな船体を優雅に優雅に揺らしながら遠ざかっていく淡青丸。その後ろ姿は、ため息が出るほどの美形でありました。(蒲生 俊敬)

### とくに思い出深い2航海

(その1)淡青丸にとって唯一の本格的な外航であった台場〜グアム間のKT-95-9及びKT-95-10航海は延べ27日に渡った。それに先立ち筆者が乗船したハワイ大学のMoana Wave号は、伊豆海嶺で25日間に約120回の岩石ドレッジを行う途中深刻な物資不足に陥り、グアムに向かう淡青丸と姉妹岩(?)付近で密会、支援を受け航海を完遂できた。グアムでの5停泊間、淡青丸やタモンビーチでの焼肉パーティーは常に盛会であり、その後の研究航海の糧となった。(その2)地質系最後の淡青丸KT-12-35次航海は、当初の航海計画が取り下げられ、急遽復活した慌ただしい航海であったが、学生、若手研究者の参加そして船側の協力により、研究・教育面で充実した最終航海となった。(石井 輝秋・深田地質研究所)

### 淡青丸エアコンプレッサー

2代目淡青丸の装備品としてわれわれ海底堆積部門が最優先した要望は、これまで可搬式であったエアコンプレッサーを、船内装備品として搭載することでした。決して広くない機関室に設置するにあたり、多くの困難がありました。しかし、機関部・造船所技術者・製造会社の皆様の知恵と協力を得て、船内装備を実現することができました。エアコンプレッサーは音波探査の最重要のインフラであり、日本周辺の海洋地質調査に大きく貢献しました。(徳山 英一・高知大学海洋コア総合研究センター)

### 戦場のごとき観測現場

生元素動態分野では、ほぼ年に1度のペースで、伊豆近海・相模湾を中心に淡青丸の研究航海を行ってきました。毎回とにかく足の踏み場もないほど研究機材であふれかえった研究室でした。淡青丸の航海ですから出航後に機材を片付ける間もなく、すぐに測点に到着します。しかも、いきなり大量採水の観測が始まり、海水試料が次から次へと研究室に運び込まれることも多々、その後は戦場の如しでした。船員さんに「船が沈むぞ」とあきれられていたのが今では懐かしい思い出です。(小川 浩史)



愛しの淡青丸(蒲生俊敬提供)

## 大槌レポート⑥

2011年3月に東日本大震災で被災した岩手県大槌町と、そこに立地する大気海洋研究所の附属施設である国際沿岸海洋研究センターの復興状況、周辺海域の調査結果を逐次報告します。

## シンポジウム「大槌の復興から世界へひろがる海洋研究」報告

木暮 一啓 副所長、地球表層圏変動研究センター生物遺伝子変動分野・教授、プロジェクトリーダー

2012年1月から文部科学省の支援を受けて始まった「東北マリンサイエンス拠点形成事業」は、東北大学、独立行政法人海洋研究開発機構と東京大学大気海洋研究所が連携し、10年間にわたって地震と津波で被害を受けた東北沿岸域の科学的な調査を行い、それを通じて漁業の復興へのお手伝いをしていこうとするものです。大気海洋研究所は大槌の国際沿岸海洋研究センターを拠点として観測、研究を展開し、大槌を地域さらには世界に開かれた新たな海研究の場として作り上げていくと同時に、水産業を軸に、科学と地域の新たな接点を作り上げていくことを目指しています。

2012年の前半は、まず機器類を設置して観測体制を築き上げ、持続的な研究を開始することに重点が置かれてきました。しかし、この事業は漁業復興への貢献を謳っており、何よりもまず大槌周辺の地元住民の方々にこの事業の意図を伝え、今後の協力体制を作り上げていくことが必要です。このために、7月16日午後、大槌町中央公民館大会議室にてシンポジウム「大槌の復興から世界へひろがる海洋研究―東北マリンサイエンス拠点づくりに向けて―」を開催しました。

シンポジウムに先立ってまず新野宏所長から、さらに続いて戸谷一夫文部科学省



シンポジウムの風景

研究開発局長、上野善晴岩手県副知事、碓川豊大槌町長らに挨拶を頂きました。いずれの方々も復興の重要性とそれに関わる本事業への期待を表明されました。その後、「プロジェクトリーダー」(東北マリンサイエンス拠点形成事業の一つとして、大気海洋研究所が岩手県大槌町を拠点におこなっている事業の愛称)のメンバーが研究の方向性について発表を行いました。研究はまだ始まったばかりで成果は限られていましたが、今後どのような研究を行い、どのように地域の産業に貢献して行きたいか、という視点からの発表が行われました。また、発表に続いて総合討論が行われ、時間一杯を使って参加者との活発な議論が続

けられました。最後に本事業全体の代表者である東北大学木島明博教授から閉会の挨拶を頂いた後、「おらが復興食堂」にて懇親会が開かれ、多くの方々が酒を酌み交わしました。本シンポジウムにはこれまで

の一方、参加者には必ずしも実際に漁業に携わるの方々が多く見られたわけではなく、実際にそうした体制を作っていくにはこれまでの我々の発想とは異なる多角的かつ地道な活動を続けていくことが必要で、それは容易ならぬ作業であることをひしひしと感じさせられました。



会場となった大槌町中央公民館には多くの参加者が集まった

本シンポジウムに



# 新スタッフ紹介

2012年9・10月に着任した教職員を紹介します。①氏名・所属、②出身地、③趣味、④ひとこと



①山崎 俊嗣(海洋底科学部門海洋底地球物理学分野・教授)  
②愛知県③音楽(つくば学園都市オーケストラでコントラバスを弾いています)、ジョギング  
④約30年勤めたつくばの産業技術総合研究所から9月1日に着任しました。前の職場に比べ、学生がたくさんいて雰囲気は若々しいですね。私の研究のキーワードは海洋底と地磁気です。食べること飲むことも好きです。よろしく願います。



①山口 飛鳥(海洋底科学部門海洋底地質学分野・助教)  
②兵庫県神戸市  
③旅・猫・日本酒・紅茶  
④本郷での院生時代、中野のふらっとアワーにたまに顔を出していました。皆様とともに、研究・教育を楽しみつつ大気海洋研を盛り上げていきたいと思っています。よろしく願います。



①西部 裕一郎(東北マリンサイエンス・特任准教授)  
②兵庫県神戸市  
③ラケットスポーツ(特にバドミントン)  
④中野の海洋研時代に研究員として3年間在籍していましたが、柏キャンパスへ移転した直後に転出したので、新しい研究所にはほとんど来れず当時は残念な思いをしました。今回、2年半ぶりに大海研へ戻ってきて、設備の立派さに改めて驚いています。どうぞよろしく願います。



①戸田 亮二(観測研究推進室・技術職員)  
②千葉県市川市  
③カメラ・お酒・オンラインゲーム・ドライブ・ラーメン二郎  
④9月まで東京海洋大学でプランクトンネットを曳いていました。10月から観測研究推進室で観測機器(特に生物系)の管理や整備をさせて戴くことになります。皆様の海洋観測研究のお役に立てよう頑張ります。写真はラーメン二郎品川店です。



①沢田 雅洋(地球表層圏変動研究センター大気海洋系変動分野・特任助教)  
②青森県八戸市 ③料理(それほど上手くない)、ジョギング、スキー、猫いじり  
④今年の10月に東北大から大気海洋研究所に異動してきて、単身生活から家族3人で住むようになりました。ここでは数値モデルを用いた台風の発生・発達過程などの研究に取り組みたいと思います。娘が大きくなったら雪山と一緒に滑りたいです。



①広瀬 雅人(東北マリンサイエンス・特任助教)  
②大阪府豊中市  
③音楽(チェロ)・スポーツ・生物に関すること全般  
④コケムシという動物の研究をしています(写真)。これまでは発生や系統分類の研究を行い、調査で国内外を飛び回ってききましたが、これからは大槌湾を中心に固着生物群集の多様性と遷移過程に関する生態学的研究を行う予定です。また、沿岸センターと地域の復興にも貢献していきたいと思っています。

# 客員教員紹介



**Heinz Karl Blatter**  
気候システム研究系・客員教授  
委嘱期間  
2012年9月21日～2013年2月20日  
スイス連邦工科大学・名誉教授

5か月柏に住みAORIで研究するのをエンジョイしています。私はスイス国立工科大学の大気学気候学研究所の名誉教授です。専門は氷河力学と熱力学のモデリングです。阿部彩子先生の研究室の客員教授です。この23年間、阿部先生と一緒に8本の論文を出版しました。客員教授としてAORIにいる間は氷期サイクルと氷床海洋間の相互作用について研究する予定です。大気海洋研究所で過ごす機会をいただいたことを、阿部先生と研究所の皆様にお礼申し上げます。



**Tezer Esat**  
海洋底科学部門  
海洋底テクトニクス分野・客員教授  
委嘱期間  
2012年8月2日～9月27日  
オーストラリア核物研究所/  
オーストラリア国立大学・主任研究官

It was a real treat to visit and work at AORI during August-September at Dr. Yusuke Yokoyama's laboratory at the Department of Ocean Floor Geoscience. My work at the Australian Nuclear Science and Technology Organisation and at the Australian National University is focussed on determining past sea-levels and climates through dating of fossil coral samples collected from locations worldwide. In this I have collaborated with Yusuke for over a decade and a half. Our latest venture was under the International Ocean Drilling Program's underwater fossil coral drilling expedition to the Australia's Great Barrier Reef. This work has produced a wealth of new and exciting results for the period as the Earth's climate was emerging from the last great ice age.



**Michael Dagg**  
海洋生態系動態部門  
浮遊生物分野・客員教授  
委嘱期間  
2012年10月5日～12月5日  
ルイジアナ大学  
海洋コンソーシアム・教授

I am pleased to be a Visiting Professor in the laboratory of Dr. Atsushi Tsuda at AORI. I am a Biological Oceanographer from the Louisiana Universities Marine Consortium in the USA. Much of my research over the past 30 years has been on the biology and ecology of the most important planktonic copepods in this North Pacific Ocean, *Neocalanus* spp. While I am in Japan I will work with Dr. Tsuda and another colleague, Dr. Hiroaki Saito, to write a review paper on *Neocalanus* spp. I will also visit other universities and fisheries labs to expand my knowledge of Japanese science and share my knowledge with Japanese colleagues. I greatly appreciate this opportunity and hope that my collaborations will contribute to AORI science, and to improved understanding of the North Pacific Ocean.

## 研究人生よもやま話

### 旅行、英語と研究

狩野 泰則 海洋生態系動態部門底生生物分野・准教授

大気海洋研究所の研究者たちが自らの研究生活について、反省談、失敗談、今だから言える話、などなどを後進に資することを期して語ります。

初めて海外に行ったのは学部の終わる初春で、いわゆる卒業旅行です。友人2名の誘いで、戻込みしつつもマレー半島へ出かけました。しかし旅行は1人に限るので、身勝手な私は海外での移動・宿泊について最低限の知識を得てから彼らと別れ、タイでの後半を単独で過ごすことにしました。この2週間の濃密であったことは国内での野宿旅の比ではありませんで、なんで今まで日本で満足していたのだ、ああもったいなかった、ここなら300円で屋根も壁もある部屋で寝られるし、などと世俗的なことも含めて後悔しきりでした。しかしさらに感動的であったのは、それまで10年間習ってきた英語が、なんとコミュニケーションの道具だったのだ、と発見できたことです。私は高校の時から英語の授業が嫌いでした。「こんなの社会に出て役に立たないしー! けっ!」とうそぶく、重度の世間知らずでした。横浜の秘境と呼ばれていた実家周辺では、今では嘘のようですが英語圏からの外国人はほぼ見当たらず、中・高校のTAもおりませんでした。私は20歳過ぎでようやく英会

話のまねごとを初体験したのでした。次の、もっともともな海外経験は同年秋、修士1年のときです。理学系生物科学専攻の院生として加瀬友喜先生の研究室(国立科学博物館)に進んだのですが、当時加瀬先生は世界の海底洞窟で生物調査する科研プロジェクトを率いておいででした。この1997年は10月のハワイから12月のパラオまで53日間の日程、参加者のうち学生は私とグアム大学の院生 John のみでしたので、彼とツインの部屋をシェアすることになりました。よく「読み書きはいけど英会話は苦手です……」などと言いますが、こちらは読み書きすら相当に怪しく、よって John からすれば意思疎通の難しい初対面の日本人と長期同室であって、思えば恐ろしいことでした。彼もその supervisor の Gustav も驚異的な親切心と辛抱強さでもって、常に笑顔で接してくれましたが、やはり調査の作業がしんどくなる部屋でもお互い無口になりがちで、他にも無知ゆえの失敗続きだった私は日本に帰るばかり考えました。「えーといま12日目だ

ろ、全部で53日だから、あと77.4%だな」と紙に書き書き小数1位までじっくり計算しました。加瀬先生にはその後もあちこち連れて行ってもらい、単独でも在外研究・調査などの機会が増え、私の英語は幾分ましになりました。語学不得手かつコミュニケーション能力全般に多少の難あり、という多くの院生・若手研究者にとって、「海外でぼつんと一人孤独、でも努めて明るく何とか頑張る」というのは必須の過程ではないでしょうか。また、大海研にはせっかく大勢の留学生や外国人研究者がおいでですから、日本人院生の皆様には、恥ずかしがらず面倒がらず、ホスピタリティを大いに発揮して、ついでに英会話の経験を積んで頂ければ嬉しいなと思います。



タイの果物。英語でのサバイバルを初体験した卒業旅行を思い出します。

## 受賞

佐野 有司 海洋化学部門大気海洋分析化学分野・教授  
第32回(平成24年度)島津賞 [2012年12月]  
受賞題目  
「高感度質量分析計を用いた海洋地球化学の研究」

須藤 竜介 海洋生命科学部門行動生態計測分野・特任研究員  
Zoological Science Award(日本動物学会論文賞)・  
日本動物学会藤井賞 [2012年9月]

受賞論文  
Sudo R et al., Dynamics of Reproductive Hormones During Downstream Migration in Females of the Japanese Eel, *Anguilla japonica*, Zool. Sci. 28: 180-188

小池 みずほ 理学系研究科地球惑星科学専攻・修士課程1年  
質量分析学会2012年度同位体比部会  
ポスター発表賞 [2012年11月]

受賞題目  
「ALH84001のリン酸塩鉱物におけるU-Pb年代および水素同位体比分析」



受賞時のようす。右から2人目が小池氏

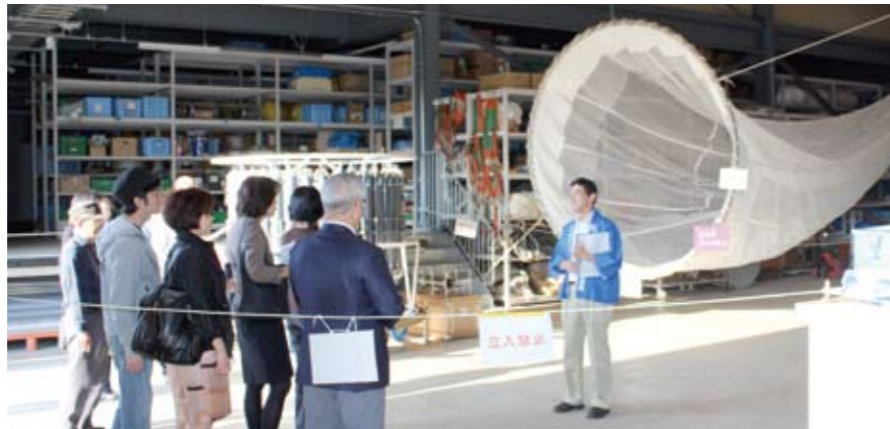


# 柏キャンパス一般公開 2012

河村 知彦 国際沿岸海洋研究センター生物資源再生分野・教授

平成24年度の柏キャンパス一般公開が、2012年10月26日(金)と27日(土)に実施されました。今年は晴天にも恵まれ、例年以上の大盛況となりました。あまりに多くの方が来られたため、来場者数を正確に数えることはできませんでしたが、大気海洋研究所全体(大気海洋研究棟と総合研究棟の気候システム系の催し)で2日間で4,000人を超える方に来ていただきました。

各研究室や研究プロジェクトの研究内容を紹介したパネル展示や模型実験(大気海洋研究棟と総合研究棟で実施)、生きた海の生き物に触れるタッチプール、珍しい深海魚の標本に触れるコーナー、海藻押し葉教室、紙芝居、クイズラリーなど昨年も好評だった催しに加え、砂の中から星砂と呼ばれる有孔虫の骨格を探す企画「星砂を探してみよう」、体験型装置を使ってバイオリング科学を知る「バイオリングサイエンスってなに?」、実験装置を使っていろいろな形の渦や竜巻を作り出す「渦を作ろう」、飼育室および海洋観測機器棟へのガイドツ



ガイドツアー「海洋観測機器棟」

アーなど、新たな企画も行われました。また、これも新たな試みとして、大学生や高校生が大学院生から直接話を聞くことができる「AORI Café 学生生活も一般公開!」が有志の大学院生によって企画運営されました。小さな子供連れの方にも楽しんでいただけるよう、「うみのこどもべや」として幼児向けの絵本や遊び道具の置かれたプレイルームも設置されました。毎年比較的年配の来場者が多い金曜日には一般向けの3題の講演(「うなぎのはなし」、「竜巻の謎に迫る」、「アワビの話ー大津波の影響は?」)が、若者が多く来場する土曜日には小中高生にも楽しんでいただける3つの講演(「ウミガメがみている世界」、「深海のハンターマッコ



小学生から大人までを対象にした講演会

ウクジラ」、「マグロはおもしろい」)がありました。どのイベントも大盛況で、ご来場いただいた方には大いに楽しみながら大気海洋研究の最先端に触れていただけたことと思います。

また、今年なんとといっても来場者の目を惹いたのは、エントランスホールを飾った素晴らしいバルーンアートでした(次ページ参照)。大気海洋研究所の卒業生、須原三加さんにボランティアでプロデュースしていただいた企画です。まさに芸術的な風船の飾り、風船でできた海の生き物たちは、今年の一一般公開を大いに盛り上げてくれました。



ガイドツアー「飼育室で海洋生物研究の現場をみてもみよう」



来場者アンケートでもっとも人気が高かった「星砂を探してみよう」

## 女子中高生理系進路選択支援イベント「未来をのぞこう!」

沖野 郷子 海洋底科学部門海洋底地球物理学分野・准教授

柏キャンパス一般公開の2日目の2012年10月27日(土)に、昨年ひきつづき女子中高生理系進路選択支援イベント「未来をのぞこう!」が行われました。大気海洋研究所では、「海で学ぶ・海で働く」をキーワードに研究活動体験を主とした企画を実施し、女子中高生15名が参加しました。研究体験のひとつは、狩野泰則准教授による「深海から新種の貝を探そう」、顕微鏡で貝を観察しました。もうひとつは高敷緑教授による「雨量計を使ってみよう」、実際に総合研究棟の2階からホースで雨を降らせて降雨強度を測りました。研究のあとは、各部

門の女性大学院生を交えて「はま」のお寿司を食べ、理系学生の生活や進路選択や受験の話にもありがとうございました。



「深海から新種の貝を探そう」深海の泥を顕微鏡で観察し、貝類などの生物を探し出しました



「雨量計を使ってみよう」降雨強度測定の準備作業

## 一般公開でのバルーンアートについて

須原 三加 海洋生物資源部門 資源生態分野・修士課程修了(2011.3)、バルーンアート製作担当

「子どもから大人まで、みんなが楽しめる空間を」このことをテーマに掲げ、半年ほど前からデザインに修正を重ねてきました。

本番の1週間前からは「合資会社Make Space」さんの作業場をお借りして、フレームを作成しました。一般公開前日の設営には、福島、栃木、埼玉、千葉、東京、愛知からバルーンの先輩や仲間たちが



「うみのこどもべや」:バルーンアートの教室とバルーンプレゼントを、一般公開期間中に5回行いました。お子さんだけでなく、親御さんも職員さんも、みんなバルーンに夢中に。目の前で、皆さんに笑顔になってもらえる瞬間が、私は一番好きです。



エントランス:柏キャンパスの西端にある大気海洋研究所。遠くからもその存在が輝くように高さ3mほどにもなる大きなオブジェを製作しました。タイトルは「エントランスは夢への入り口」。アオリイカ(大気海洋研究所の頭文字AORIより)とクジラとウナギのオブジェがみなさんを迎えてくれます。

ボランティアで集まってくださり、イメージ以上の作品を完成させることができました。また、今回の装飾には教職員・学生の皆さんのご協力も不可欠でした。本当にたくさんの方に支えられ、皆さんとともに作り上げた作品だと思います。

いつもとは違った大気海洋研究所を、お楽しみいただけましたでしょうか。



屋内装飾:(写真上)屋内には、躍動感のあるオブジェを製作しました。向かって右側、タコとカニのエリアでは、沿岸の岩礁域を、左側のシュモクザメのエリアでは、沖合の海を表現しています。(写真下)1mをこえる5つの生き物のオブジェの中には、アルミ棒を曲げて作った立体フレームが入っています(エントランス含む)。

Special Thanks (敬称略):宮坂宏・相馬知江(Make Space)、松村信顕・松村靖子(Windship)、大山政孝(airs ball)、清川啓介(BRAVO)、大浦圭鼓(POPPO Balloon)、飯塚泰依子、岸里稲(バルーンショップ Decoba)、お手伝いいただいた大気海洋研究所の教職員・学生、のみなさん。



吹き抜け:高さ28mの吹き抜けを活用して、上へ上へと螺旋状に立ち昇る気泡をデザインしました。吹き抜けをバルーンで装飾する際、上から吊るすことも下から浮かせることも出来ないという、構造上の難題がありました。悩み抜いた結果、ドーナツ型のアドバルーン(写真下)を浮かべ、そこから吊り下げるという案に行きつきました。アドバルーンからは16本の糸が下がっており、美しい螺旋を描くことができました。



# Event Report

イベントレポート

## ■ 大気海洋研究所 さいえんす寿司BAR

サイエンスカフェならぬ「さいえんす寿司BAR」。一般の方に、お寿司をつまみながらサイエンスに触れていただく、大気海洋研究所の研究を知っていただく、という「お魚倶楽部はま」とのコラボ企画です。寿司店を併設する大気海洋研究所ならではの催しでしょう。その第1回目が2012年11月10日(土)に行われ、37名の参加者をお迎えしました。前所長の西田睦名誉教授に「私たちは今どこにいるのか? 100年後の日本の自然と社会を考える」というテーマで話題提供いただき、スタッフによる大気海洋研究所の研究紹介などもお聞きいただきました。その後、さまざまな地魚のおいしいお寿司を食べながら、西田先生のお話や大気海洋研究所の研究をめぐってスタッフを交えて活発な議論が行われました。終始和やかな雰囲気の中で会話が進み、とても楽しい会になりました。(河村 知彦)



お寿司をつまみながらのリラックスした雰囲気の中、活発に議論が行われました

## ■ 福島原発事故の海洋へ与える影響を 探る国際シンポジウムを開催

2012年11月12・13日(月・火)に山上会館にて、大気海洋研究所と米国ウッズホール海洋研究所が中心となって、海外からの35名を含む90名の専門家により、福島原発事故による海洋放射能汚染の実態と住民の健康・水産食品の安全性・水産業等へ



伊藤謝恩ホールでの一般向け公開講演会「フクシマと海」のパネルディスカッション風景

の経済的影響やそれに対応する施策・報道機関の対応など13課題についての招待講演と2つのパネルディスカッションが行われ、活発な議論の場となりました。そのまとめが11月14日(水)に伊藤謝恩ホールにおいて200名を超える参加者のもと、一般向け公開講演会「フクシマと海」で報告されました。会議内容の詳細(ビデオ・発表スライド等)は以下のURLからご覧下さい。(http://www.whoi.edu/page.do?pid=108096) なお、今回の会議の内容を一般向けにOceanus誌の特集号として英語版と日本語版で出版する予定です。また、2013年5月9日には一般講演会をウッズホール海洋研究所にて開催予定です。(植松 光夫)

## ■ 濱田総長が沿岸センターを訪問 職員を激励

2012年11月16日(金)、濱田純一総長が碓川豊大榎町長と今後の復興への取り組みなどについて会談された後、国際沿岸海洋研究センターに立ち寄られました。3階部分を整備して仮復旧し、震災後の海洋生態系に関する研究や共同利用研究になんとか対応している様子について見学され、

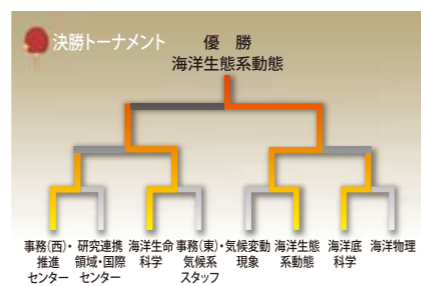


濱田総長(前列中央)を囲む沿岸センター職員一同。沿岸センター3階の事務室で

限られた時間でしたが、センター3階の事務室において事務系職員5名、船舶職員3名と懇談されました。総長から「依然厳しい環境と思いますが、復旧に向けて頑張ってください」と激励を受け、職員一同感激の面持ちでした。(道田 豊)

## ■ 大気海洋研究所卓球大会

今年で3回目となる大気海洋研究所卓球大会が2012年11月27日(火)から12月11日(火)までの2週間にわたって開催されました。3年目ともなると大会に備えて本格的に練習をするチームも出てきました。結果は練習の成果を遺憾なく発揮した海洋生態系動態部門が優勝。準優勝は海洋生命科学部門、第3位が海洋底科学部門でした。今年は特に事務部+共同利用共同研究推進



卓球大会決勝戦、最後のダブルス戦

センターチーム、気候系スタッフチームの健闘が光り、両チームとも決勝トーナメント進出を果たしました。来年も卓球大会を開催する予定です。研究所のみなさん優勝を目指して頑張ってください!(日下部 誠)

## ■ AORI写真コンテスト2012

写真コンテストも今年で3回目となりました。今年は長年お世話になった淡青丸最後の年です。そこで、従来の「海・空」「生き物」「人物」「その他」の4部門の他に、「淡青丸」部門も設け、合計5部門で写真の腕を競ってもらいました。締め切り当日に応募が殺到し、合計81点もの作品が揃いました。主催者として嬉しい限りです。応募作品の中には、思わず唖ってしまうような力作もあれば、中にはインクと紙の無駄遣い?と言いたくなるような珍作も。人気投票で、部門ごとに優秀作品賞と2等賞を決め、さらに1点、所長自ら所長特別賞を選び、2012年12月17日(月)のクリスマスパーティで、受賞者に賞状と賞品を贈呈しました。研究所の皆さん、来年に向けてシャッターチャンスを見逃さぬよう!(猿渡 敏郎)

## AORI 写真コンテスト 2012 受賞作品

賞	作品タイトル	受賞者
所長特別賞	「中野ラストページ」	事務部 田辺慎一
淡青丸部門	優秀作品賞 「旧淡青丸による相模湾・伊豆諸島近海での初めての大気汚染観測 KT-76-7(上)いざ出航! 真中の人間が申込者(下)徹夜で大気観測・採取(窒素酸化物やオゾンなど)」	気候システム研究系 鶴田治雄
		電子計算機室 石川浩治 海洋大気力学分野 三澤信彦
海・空部門	2等賞 「後ろ姿も大事です」	海洋大循環分野 柳本大吾
	優秀作品賞 「失敗つづき……でも」	海洋底地球物理分野 藤井昌和
生き物部門	2等賞 「3時のおやつ」	行動生態計測分野 西田由布子
	優秀作品賞 「1/5000」	資源解析分野 大里和輝
人物部門	2等賞 「シンクロナイズド・スイミング」	浮遊生物分野 西川淳
	優秀作品賞 「未知との遭遇」	東北マリンサイエンス 福井美沙
その他部門	2等賞 「コンタクト」	浮遊生物分野 西川淳
	優秀作品賞 「イカヘー、ならえっ!」	行動生態計測分野 西田由布子
	2等賞 「キタ——ッ!」	資源生態分野 張愷



「いざ出航! 真中の人間が申込者」

## AORI スタッフ日誌 ⑩

事務部 総務チーム

大気海洋研究所には、教育研究活動を支援するさまざまな職種のスタッフが勤務しています。このコーナーでは、スタッフの仕事を通じて、研究所の活動を別の角度から紹介します。

私、もみじ(柴犬♀)。今日はとっても天気がいいので、私のご主人様が仕事をしている大気海洋研究所まで散歩に来てみた。ご主人様は1階事務室にある総務チームにいるんだ。一体どんなことをしているところなのかな?

事務室に入っただけで総務チーム。なんだか人の出入りがとっても多いところだね。外からのお客様や荷物や郵便の配達のお兄さん達もよく来るけど、所内のみ

んなも困ったことがあるとまずここに聞きにきているみたい。所全体の窓口なんだね。みんなそれぞれ色々なお仕事をしているね。奥の方では真面目な顔で人事関係のことをしているよ。職員の採用・退職の手続きや、給与、諸手当、兼業に関すること、出張依頼や財形貯蓄に関することをしているんだって。別の人は次の教授会の準備中。他にも所内の企画・調整や、就労管理システムを使って勤務時間の管理をしているよ。

外部からの問合せに電話対応している人もいますよ。いろんなことを聞かれているね。手前では大量の郵便物や学内便の仕分けをしてどんどん配っているね。すごいなあ。

その他にも、駐車許可証、駐輪シールの発行、証明書・承諾書の発行など、所内のみんながこのキャンパスで生活していくのに関係する身近なお手伝いもしているんだって。

もっと他にも色々なお仕事がありそうだけど、今日はたくさん見て疲れたなあ。

今日事務室を覗いてみてわかったことは、総務チームのみんなは親切でとってもいい人だってこと。なので、わからないことや困ったことがあったら気軽に相談してみてね。

さて、今日のお散歩は終了。ご主人様に見つからないように先にお家に戻っていい子で留守番してないよ。その前に水槽のお魚を見てから帰ろうかな。(小野口幸雄、岡部友紀、荒井泰之、原典子、根目沢純子)



レポートのそみじです。趣味は石集めです!



総務チーム Five、力を合わせて疑問質問にお答えします!



## 書き手自身による 新刊紹介

### ミナミイセエビ

驚くべき生態と増養殖への挑戦  
橋高二郎 監修・早川康博 編集(西田周平 分担執筆)  
A5判・372頁・4,200円(税込)  
生物研究社・2012年3月刊



ミナミイセエビ類は南半球に生息するイセエビ科のエビ類で、初めて耳にする人も多いと思います。ですが、日本で「イセエビ」として消費されているエビ類のほぼ半分はミナミイセエビ類なので、実は私たちに大変身近な生き物です。近年、日本・オーストラリア・ニュージーランドの研究者を中心とした共同研究によりミナミイセエビ類の研究が大きく進展しました。本書は、これらの成果をもとに、ミナミイセエビとはどのような生き物か、その研究史・分類・形態・進化・生活史・幼生の生態・沿岸への回帰機構・養殖技術などあらゆる面から、現場での調査の様子や苦労話もまじえて紹介しています。また、イセエビ全般の分類・生態に関する情報も満載です。(西田 周平)

### イワシ

意外と知らないほんとの姿  
渡邊良朗 著  
A5判・フルカラー 112頁・2,520円(税込)  
恒星社厚生閣・2012年11月刊



イワシ類は世界の漁獲量の20~30%を占めており、人間にとって重要な資源です。人間にとってばかりでなく、ブリやマグロなどの魚類、鯨類や海鳥類のえさとして、海洋生態系の中で重要な位置を占めています。イワシ類の資源量は数十年単位で大きな増減を繰り返してきました。豊漁と不漁はなぜ繰り返し訪れるのか、イワシ類資源を持続的に利用するにはどうしたらよいのだろうか、海の資源が減っても養殖があれば大丈夫なのか、この本はこんな疑問に答えます。中学・高校生向けの本ですから、2時間もあればすらすらと読めてしまいます。イワシ類を通して見えてくる海の世界や、海と向き合う人間の営みについて、一般の読者にも考えてもらいたいと思って書いた本です。(渡邊 良朗)

### 地震に克つニッポン

東京大学海洋ライアンス編  
B5判・112頁・1,365円(税込)  
小学館・2012年7月刊



海洋ライアンス・ビジュアルブック第2巻は地震の特集号です。表紙の色が気になりますが、今読んでもらいたい本です。東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)を経験後、近づきつつあるとされる震災に私たちはどう備えるのか。そのためにこの本では、被災や復興の現状から、地域社会の立て直し方、さらには防災・減災の考え方など、これからのヒントをコンパクトに掲載しています。地震学、歴史学、都市工学、環境倫理学、経済学、水産学、教育学など、海洋ライアンスの特長である分野をまたいだ構成で、フルカラー。高校生以上であれば、誰でも興味を持って読んでもらえると思います。(野村 英明)

### アワビって巻貝!?

磯の王者を大解剖  
河村知彦 著 恒星社厚生閣・2012年11月刊  
A5判・フルカラー 116頁・2,520円(税込)



中学生でも読める海の生き物の本。本書はそのシリーズ第5弾として刊行されました。日本人ならおそらく誰もが知る高価な海産物「アワビ」ですが、生き物としての彼らの姿を知る人は多くはないかもしれません。アワビが巻貝であることすら知らない人も多いのではないのでしょうか。中学生にも分かるようにという部分で苦労しましたが、日本の沿岸に棲むアワビの仲間について、基本的な分類や生態から資源変動要因まで、最新の研究成果を含めて易しく解説しました。また、アワビと日本人の長い付き合い、アワビ漁業や種苗放流事業の現状と問題点、昨年の大地震、大津波が三陸沿岸のエゾアワビ個体群に及ぼした影響についても紹介しました。日本の海のかつては豊かだった海の幸たちと、私たち日本人がこれからどのように付き合っていくべきかを考えていただけたらと思います。(河村 知彦)

### 正しく理解する気候の科学

論争の原点にたち帰る  
中島映至・田近英一 著  
四六判・208頁・1,659円(税込)  
技術評論社・2012年12月刊



地球温暖化現象について論じた一般書は数多くあり、そこにはたくさんの役立つ知識が示されています。しかし、それでもなお、地球温暖化に関する疑問の声が絶えずあります。これは、地球が非常に大きすぎてさまざまな構成要素から成り立っているために、気候変化のメカニズムも複雑だからです。そこで本書では、視点を全地球環境史が見えるまで広げて考えてみることにしました。その中から見えてくる、現在の問題の特殊性についてみんなで考えてみたいと思います。(中島 映至)

## 人事異動一覧 \*H24.10~12

\*採用は新規のみ記載。ただし、特定有期⇄特定短時間有期の間の異動は新規以外の者も記載

### □ 教員(常勤)

発令日	氏名	異動内容	所属・新職名	所属・旧職名
H24.12.1	早川 淳	採用	国際沿岸海洋研究センター生物資源再生分野・助教	日本学術振興会特別研究員(独)水産総合研究センター増養殖研究所
H24.12.16	北川 貴士	昇任	国際沿岸海洋研究センター生物資源再生分野・准教授	東京大学大学院新領域創成科学研究科・助教

### □ 特定有期雇用教職員

発令日	氏名	異動内容	所属・新職名	所属・旧職名
H24.10.31	吉河 秀郎	退職		海洋底科学部門海洋地球物理学分野・特任研究員
H24.11.30	金田 幸恵	退職		海洋物理学部門海洋大気学分野・特任研究員
H24.12.1	石田 章純	採用	海洋化学部門大気海洋分析化学分野・特任研究員	東北大学大学院理学研究科・COEフェロー

### □ 短時間有期雇用教職員

発令日	氏名	異動内容	所属・新職名(兼務職名・所属)	所属・旧職名(本務職名・所属)
H24.11.1	山西 霜野子	配置替	陸上研究推進室・研究支援推進員	海洋化学部門 海洋無機化学分野・事務補佐員
H24.12.1	矢野 マーリア	採用	東北マリンサイエンス・事務補佐員	